

# イソタケルの意味するもの その(二)

## 五十猛神の真相に迫る

いそたけるのかみ

⑧

三井 淳

魏志倭人伝を見ると、魏の帯方郡(たいほうぐん。ソウル辺り)の役人である

体的な人物が存在し、それは新羅紀二十三年夏四月条。史上に燦然と輝ける武將である。名を「異斯夫」といふ。日本式では通常「いしふ」と読むが、古代の新羅では、「イサマラ」と呼ばれていた蓋然性(がいぜんせい)の高さは、「続往還を行く③広丸」の条で説明しておいた。

梯備(ていしゆん)が西暦二四〇年、張政が二四七年に来倭し、伊都国に滞在している。彼等の帰命報告が魏志倭人伝の基資料となったと思われ、そのことにより、三世紀なかばの伊都国の実在性が立証されうるのである。以上前回の上垣外説批判の補足であるが、イソタケルが「伊西(イソ)の勇者、王」を意味するの指摘した上垣外氏の眼力については、感嘆措(お)く能わざるものがある。

実は伊西の地名を負う人物は、日本書紀でも伊叱夫

礼智干岐(いしづれちかんき)として登場する(継体紀二十三年夏四月条)。これらの異斯(いし)は伊西(イソ)に同じことで、本貫地(ほんかんち)、つまり伊薩(いさ)氏(いさ)の地を謂うものであると看破したのが、鮎貝房之進(あゆがいつさのしん)である。鮎貝(あゆが)こそは、古代朝鮮語解読の第一人者であり、今においてなお他の追従を許さぬ存在である。新羅の古習俗として此の「異斯夫」も地名を負ひたる人と思はるるが、當時新羅領域内として慶尚左道清道(けいしょうさどうせいどう)の古名「伊西」を負ひたる人名と推定せり。「伊西」も「異斯」「伊叱」と同借字なればなり。

### 日替わり連載コーナー

◇月曜日は島根県立図書館の「おす木曜日」は内藤博之さんの「ガウデ

鮎貝房之進「日本書紀朝鮮地名攷」53  
4頁 国書刊行会

「伊西(イソ)の強い男」が原義であって、「イソタケル」にほぼどんぴしゃりの言葉となる。イサマラは六世紀の人物であるが、仮反映であるとして、なにゆえ日本の開闢譚(かいびやくたん)に、遙か後世の異国人が顔を出すのか。

(五十猛歴史研究会員 みつあいあつし)